

第12回

秀麗富嶽十二景写真コンテスト

入選作品

最優秀賞

厳冬の夜明け 筒井 章（静岡県伊東市） 大蔵高丸



白籟史朗氏講評

降雪直後の大蔵高丸山頂、実にすばらしい条件に恵まれ、それをみごとにものにしている。この作品は昨年のNHK富士山コンクールで推薦を獲得した作品とおなじ朝のものと思われるが、そのわずかあとのシャッター作品であろう。雪のついた茂みの赤らみが実に美しく、最高のシャッターチャンスであった。構図的には左方下部がやや気になるのが惜しい。これはカメラポジションを右に寄せることで解決する。しかし、最優秀にふさわしい秀作である。

推薦

悠然として 天野 昭吾（山梨県大月市） 雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

遠方の雁ヶ腹摺山からぐっと引き寄せた力強い作品。好天の朝の赤味が去ったあとの透明な大気の中にすくと立つみごとな富士山の均勢のとれた山姿、「悠然・・・」というより「気品高き・・・」とした方が雰囲気が伝わってくる。やや山体が中心線に近くなっているのも右方が重くなっている。やや右方を切って左へのぼしたら、さらに美しい富士山になったろう。その点に最高位をのがした因があるので、よくバランスをはかってみる必要がある。

推薦

降雪の朝 大戸 康世（山梨県大月市） 奈良倉山



白簾史朗氏講評

上空にたなびく雲をうまく画面中に生かしている。空部が多いため富士山の高さは減じたが、その分広闊とした明るい雰囲気が生かされた。ただ、奈良倉山といっても、林道の相当下部であることが前景の山と富士山の高さ、位置でわかる。横着はせずにでき得るかぎり山頂から狙いたい。いずれ近いうち山頂からの作品が選考基準になる。画面下が少し重いし、少し左が足りない。そこに留意されたし。

特選

朝日に輝く 八巻 長子（山梨県中巨摩郡） 本社ヶ丸



白簀史朗氏講評

本来なら雲海の下に富士吉田市の屋並みが見えて、なかなか特選とまではいかなくなる。雲はときとして意地悪もするかわり、こうした好条件で作者を喜ばせてくれる。屹然と立つ朝富士、苦勞して本社ヶ丸まで登った甲斐があったといえる好作。赤熱の度合いと下部の尾根、雲海、富士の山肌との移行する調子が実によい。構図のバランスも絶妙、格調ある富士山である。

特選

朝光に輝く 萩原 淑之（静岡県島田市） 大蔵高丸



白簾史朗氏講評

富士山写真ことに横位置では、富士山の山頂部を画面のどこに置くかが問題となる。たいていの写真は画面を左右に2分した中心線上、つまり中心に置くことが多いが、これは一見安定しているようでそうでなく、何ら発展性のない写真であることに気付かない。この作品はまさしく、あるべきところに山頂が配置されて間然するところがない。かくあるべきという見本のようなもので、位置だけでいうならこの作品が第一等である。あと若干早い時間帯にシャッターを切ったら、三ツ峠山の建造物がより目立たなくなり、色彩的にも一挙両得であった。

特選

初冬の朝富士 三浦 義朗（埼玉県入間郡） 奈良倉山



白簾史朗氏講評

これまた実に美しい調子の作品である。まだ明けやらぬ下界、そこから山頂の赤熱までの間の調子の変化は微妙で、その美しい調子を下部の黒い前山の尾根が引きしめている。

ただ、初冬というにはカキッとした硬質な冷たさに乏しく、一見春富士のように見えることで損をしている。わずかに初冬を思わせる点は富士山五合目から八合目にかけて強風が雪を吹きとばした一帯であるが、これが調子を少し崩しているマイナスもあった。

入賞
秋彩

片岡 初枝（静岡県富士市） 雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

この作品で第一に挙げるとすると紅葉の色再現である。赤味の強いモチーフはときとしてべったりとした感じになって微妙な調子が失われるが、この作品はまず及第点である。しかし、全体的にややピントの甘いのは、ほんの少しのカメラブレが影響していると思う。構図的には富士山と紅葉が少し近寄りすぎであること、富士山の雪が白く飛んでしまったことが挙げられる。PLフィルターを外して撮影したら、もっと色彩的に生きたと思われる。

入賞

秋色

三浦 義朗（埼玉県入間郡）

姥子山



白簾史朗氏講評

爽秋といった感じが実によく表現されている点をまず買う。手前の色づき初めた葉むらも多からず少なからず、富士山の新雪がすっきりと秋空を区切っている。快晴でなく、若干の雲があることも秋の感じをよく表している。ダブル受賞もむべなるかな、といえる高質な作品である。強いて難をいえば、富士山の右下にかかる湧雲がうるさい。これはなくもがなといえよう。

入賞

秋色

帯金 晃（静岡県沼津市）

牛奥ノ雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

特徴的な前景もなく、撮りにくいこの牛奥ノ雁ヶ腹摺山からの富士山を実にうまく狙いを定めている。まず季節もよく、秋の朝の色づきを利用して変化をつけたこと、左方に黒岳山の山頂を入れこんだことが成功のもとだ。欲をいえば富士山がやや中心線に寄りすぎていることと、右下の茂みが少しうるさいことである。右方と下方を少しずつ切ることによって、この作品はさらに質的にアップする。残念であった。

入賞

秋景 宮地 広之（東京都世田谷区） 小金沢山



白簾史朗氏講評

入選③の帯金氏と同様、撮りにくい小金沢山からの作品で入選した努力を買いたい。構図的には帯金氏の左山、右富士山の逆で、右山、左富士山でまとめている。よいアングルを見つけたものだが、やはり右方が少し多く、おまけに右からのぞいている立ち木が中途半端でこれを何とか整理したかった。もうすこし右前方から黒木と雑木のコントラストを前景としてまとめた方がよかったのでは？と思われる。

入賞

春雪染まる

大賞 芳男（埼玉県さいたま市）

大蔵高丸



白簾史朗氏講評

題名がちょっと説明不十分なところが惜しい。作品を見れば朝陽に赤く染まったという意味はわかるが、残念である。画調は実に美しいもので、好条件を存分に活かしての仕上げである。ただ、これも構図的に不備な点があり、それは富士山の位置である。やはり中心に寄りすぎたため、右裾と樹林の影の部分が多すぎる。アングルを左へ向けて右方をカットしたら、さらに上位にランクさせたい。

入賞

トウゴクミツバツツジ咲く 大戸 康世（山梨県大月市） ハマイバ



白簾史朗氏講評

美しい花、快晴の空、新雪まばゆい富士山。まったくおあつらえのモチーフが三つ、そろい踏みである。この作品、構図的には何ら文句の付けようがないが、何となく物足りない。それはツツジの花むらは大きい、何となく地味というかんじがあり、青空もすっきりしすぎていて曲がない。富士山の新雪もあまり状態がよくない。せつかく苦労したのにそれが報われなかったことになったが、これはもっと近寄って花むらを前面に大きく置くことが必要だったと思う。

入賞

輝く朝 八巻 長子（山梨県中巨摩郡） 滝子山



白簾史朗氏講評

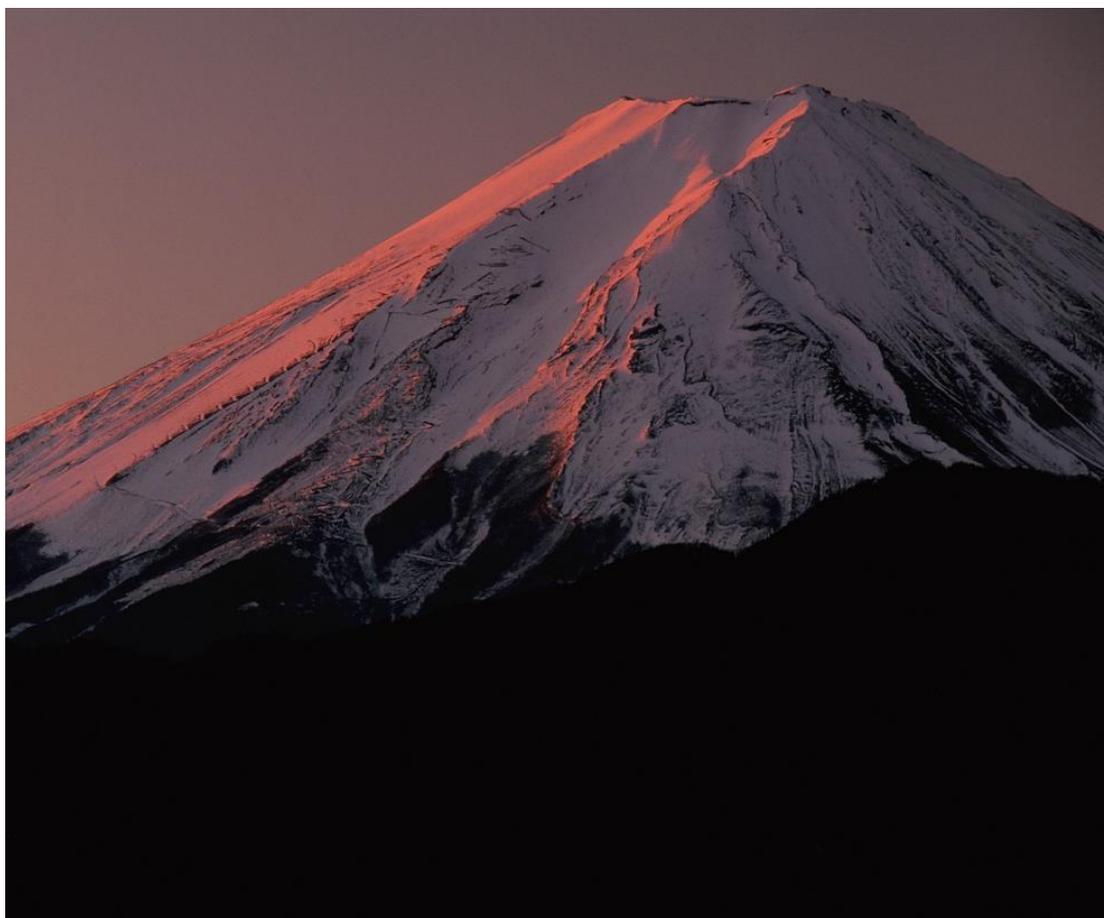
まず、応募票は正確に貼ってほしい。横位置の写真に縦貼りではマイナス点が付く。作品は滝子山という不便最大手の山であるが、この作品は富士山に向かって左方、藤沢寄りの尾根からであり山頂からではないのが残念である。手前2本の尾根が富士山の中腹を横切っているため、富士山がすくんだ感じとなってしまった。せっかく調子は良好なのだから、もうひとふんばりして欲しかった。

入賞

朝光

天野 昭吾（山梨県大月市）

笹子雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

光の当たった2本の尾根の線を最大に生かした点が実によい。ただクリスタル印画でなかった分、画面に冴えがなくなって損をしている。クリスタルだったら光の当たった線と影の分がくっきりと分離して、実に効果的だったはずだ。この山は富士山の前面に送電塔が入りこむため非常に撮りにくい。したがってこうした大写しの富士山になりがちだが、さらに工夫して独自の画面を見せて欲しい。

入賞

夜明け前 内藤 元次（山梨県大月市） 奈良倉山



白簾史朗氏講評

今回、上空を広くとってフレーミングした作品は推薦②の作品とこの作品、あと高川山からの作品と3点だけである。画調もよく、雲の形も、新雪のつき方も秋らしくていい。しかし、題名が「夜明け前」とはどうしたことかと思う。この作品は明らかに日中、すっかり光がまわっていることがわかる。なのだからよく注意して作品の内容に即した題名を付けたい。構図としてはもっと下部を切り、上部へのぼした方がよい。

入賞

雪景色 井上 和夫（山梨県大月市） 扇山



白簾史朗氏講評

みごとな雪景色であり、こうした好条件を捉えることができるのも地元作家の強味であるが、半面それを生かす努力が必要なのである。ただ、この作品もみごととはいえ、やはり扇山山頂からでなく、大分東に寄った低みからなのが残念だ。低みでなければ、こうした条件で撮影できないのだといえればそれまでだが、山頂ならばまたちがった作品も期待できる。切り方としては右奥の山の右のくぼみから切り、縦位置とした方が奥行きが出る。

入賞

雲海に明ける

伊藤 茂（静岡県駿東郡）

百蔵山



白簾史朗氏講評

百蔵山から富士を展望すると、桂川の段丘上につらなる集落がじゃまをして、どうしても俗っぽくなる。それがこの作品は桂川の谷をガスが埋め、雲海状となっているため、アルプスの高山からながめるような深遠なムードの作品となっている。調子もよく、構図的にも文句のつけようがない。ただ、遠景であるため、インパクトに乏しい。それに題名も「雲海上に・・・」とした方がよい。

入賞

霊峰雲を照す 高津 秀俊（山梨県大月市） 岩殿山



白簾史朗氏講評

昨年の最優秀賞作家としては、どうしたことか本年は振るわなかった。辛うじてこの岩殿山からの1点が入選したにすぎない。作者は昨年も岩殿山、今年も応募12点中、4点が岩殿山と地元の山に執着しているが、いつもいつも同じポジションで、おなじ視点では新しい突破口が至難となる。この作品は条件は良好だったが、上空の雲を気にしすぎたあまり構図上難がある。上空の空きすぎ、それに題名の意味が不明である。富士山が雲を照らすのではなく、光が山や雲を照らすのである。

入賞

秀涼の詩 瀬瀬 浩恭（岐阜県多治見市） 高畑山



白簾史朗氏講評

高畑山は応募6名、応募点数8点のみであった。その中からこの作品が選ばれたが、あまり上作とはいえない。しかし、他の作品にくらべて工夫のあとが見られ、それが入選の因となった。半逆光の状態を生かし、ススキの穂をうまく前景にあしらって成功している。だが、肝心の富士山は半逆光では気の抜けた感じとなった。さらにポジションを考え、富士山の右側にススキの穂がくるようにして空間を埋めることが大切。「秋涼」は『しゅうりょう』で『れい』ではない。

入賞

冬枯れの朝 松本 邦弘 (埼玉県入間市) 倉岳山



白簾史朗氏講評

倉岳山は高畑山に隣接していて、この両山はともに富士山が撮りにくい、という定評？があった。近年、山頂下の樹林が伐採されたので大分条件が良くなった。その倉岳山からの堂々とした富士山、ややポジションを左方に移せば(可能と思う)、右下方の樹林がうるさくなくなる。また日の出の条件さえととのえば、赤熱の富士山と手前が省略された画面が得られたろう。いずれにしても従来の倉岳山の富士山中、上位にランクされる作品である。

入賞

富士黎明 高橋 利延（神奈川県相模原市） 九鬼山



白簾史朗氏講評

久しぶりに九鬼山からの富士山らしい作品に出会った。しかし、この九鬼山での応募は本社ヶ丸とならんで、それぞれ2点と最少数であった。もう1点は八巻長子氏であったが、ここは高橋氏の方に一足の長があった。思い切ったアップで、他を一切省略したところがいままでとちがい、他に見られない迫力を生んでいる。これでもっと富士山に雪がついていたら、よりいっそう壮大な感じとなったと思うと惜しい気がする。

入賞

春は曙 大内 京子（千葉県我孫子市） 高川山



白簾史朗氏講評

初応募、初入選である。題名もちょっとひねりすぎた点はあるが、まずは色彩からの連想であろう。上空を広くとってののびやかな画面も題名とうまくマッチしている。なかなかの手腕であるが、PLが少し片ざきとなっているのに注意。それと応募票がこれまた横位置画面なのに縦に貼られている。こうした点にも気を配らねば、つねに秀作は期待できない。だが、次回を大きく期待できる作家であることも保障する。ぜひ応募を。

入賞

静謐富士 小谷 加代子（三重県松阪市） 本社ヶ丸



白簾史朗氏講評

作者の題名は「静謐・・・」だが、決してこの作品はそんな感じでなく、生き生きと躍動する富士である。形こそ静かに見えるが、これからさらに力を増す朝富士といえる。全体のバランスが少し中央に寄っているように思えるが、これはこれで可とされる。前景などが何もなかったため、やや中心線近く山頂を持ってきた方がおさまりがよい。八巻氏とおなじく、女性として（失礼）は力強い作品といえる。

入賞

雲表に清く 瀬瀬 浩恭 (岐阜県多治見市) 清八山



白簾史朗氏講評

これはまた端麗かつ優雅な表現である。男性である作者の繊細な心情が伝わってくる佳作品といえる。豪快なだけが富士山写真ではなく、色彩的にカラフルなものも同様に、日本独特の心情的なものがこめられたものである。若干濃度を上げた方が（濃く）、本質を失わず効果を増したろうと思う。左下の黒い尾根の端が少々気になるので、もっとアップにして、この部分を画面からはずした方がよい。

総評

審査員長 白籟史朗

第12回「大月市秀麗富嶽十二景」写真コンテストの審査は、平成16年12月末に応募を締め切り、平成17年1月20日、大月市役所3階委員会室で全審査員列席の上、同午後1時30分に開始された。応募者総数72名、応募作品数286点、第11回の応募者58名、応募点数206点をそれぞれ14名・80点と大きく凌駕した。

これまでの応募状況中、最大の応募者数は第3回の59名、応募点数では第9回の239点がそれぞれもっとも多いが、今回の12回はそれらをも13名・47点とこれをも凌駕する数字である。

地元大月市内からの応募は13名で82点、新規応募は2名である。山梨県内からは12名で40点、新規は4名。応募者数では県外がもっとも多く47名で164点、新規応募者も20名をかぞえた。これはこのコンテストが、昨年を上まわって県外に知られたことの実証であるが、当局側としては、もっと大月市内、山梨県内からの応募の増加を願うや切である。

また第1回からの通例として、特定の山頂からの富士山の応募がいまだ改まらず、12景18山頂で大きな片寄りのあることは残念である。昨年の総評でも述べたが、応募点数の少ない山頂ほど入選の確率が高いのであるから、応募者たるもの労を惜しむことなく、不便といわれる山にも登り、撮影すべきである。

今回1、2、3、5、8回をのぞく、4、6、7、9、10、11の各回同様、大蔵高丸からの富士山が、またも第6回の70点に次ぐ61点という数で最多を占めた。第2位はこれまた例によって雁ヶ腹摺山の富士山である。次いで奈良倉山、百蔵山、牛奥ノ雁ヶ腹摺山と同数の岩殿山、扇山の順になるが、他の山頂はすべて少数で、ハマイバ、高川山が各9点、高畑山が8点でややぬきん出ているのみである。

最優秀賞は筒井章氏、伊豆伊東市からの応募である。推薦①は大月市の天野昭吾氏、惜しくも最高位をのがしたが、笹子雁ヶ腹摺山とのダブル受賞である。推薦②はやはり大月市の大戸康世氏、これまたハマイバとのダブル受賞となった。

特選①はベテランの八巻長子氏、氏も滝子山とのダブル受賞。天野氏と八巻氏は今回も多く山頂からの作品を出品されたが、その努力が報われたことになる。特選②萩原淑之氏、島田市からの応募、過去最優秀賞を獲得している。特選③は埼玉県毛呂山町の三浦義朗氏、過去入賞1回から大きく飛躍、これまた姥子山とのダブル受賞となった。

他の入賞者は片岡初枝氏と宮地広之氏が2回目、帯金晃氏が初入選、大貫芳男

氏とがおなじく初入選、内藤元次氏は5回目の入選、井上和夫氏は過去推薦2回、特選3回、入選7回の大ベテランだが、今回は入選のみに甘んじた。推薦2回の伊藤茂氏も同様である。

第11回で最優秀賞だった高津秀俊氏は振るわず今回は入選のみ。特選1回、入選4回の瀨瀬浩恭氏は今回入選のみのダブル受賞。過去入選2回の松本邦弘氏は3回目の入選、最優秀賞1回、特選1回、入選4回の高橋利延氏も同様、初応募初入選の大内京子氏、入選2回の小谷加代子氏も今回は入選のみであった。

こうしてみると、やはりベテラン作家の上位入選や推薦以下の入選も同様に思える。これはコツをおぼえたというより、やはり熱心さの賜であろう。ことに前述したように複数以上の山頂から対象を望んだ作者が大半を占める。ダブル入選者が今回特に多かったのは、そうした理由からである。これからも選者のアドバイスを軽んずることなくおおいに活用してほしい。

全体としては色調・条件的には大分よくなったが、まだまだ構図のまとめ方に難がある。レベル的には確実に向上しているが、ひとりよがりものも多い。きちんと基礎を学び、定跡を踏んでこそ好作ができる。そのことをよく銘記してほしい。